

歴史今昔・今なぜ保科正之公か！

〈その1〉

今月から新たに「かみいな歴史探訪 歴史今昔 今なぜ保科正之公か」がスタートします。「保科正之公を主人公とした大河ドラマを」という運動が上伊那では高まっています。しかし、正之公の知名度はいまいち。そこで、伊那市高遠町歴史博物館の北原紀孝館長さんに正之公の足跡をたどっていただき、正之公の姿に迫ってみたいと思います。

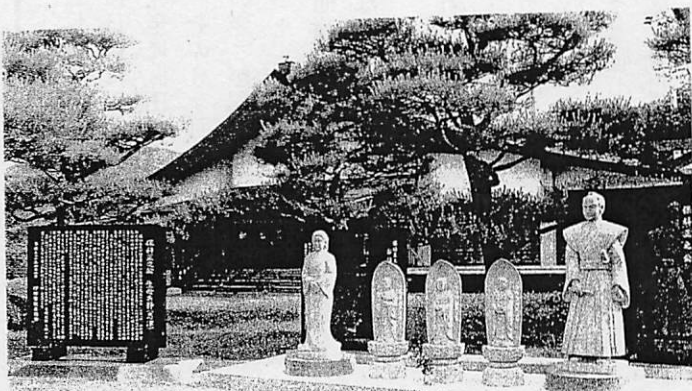


「保科正之公・お静・お静地蔵像・顕彰碑」伊那市立高遠町歴史博物館に建立

今年の高遠桜は、早咲き短期集中型であった。4月1日に公園開きを行い、続いて4日に念願であった保科正之公像の除幕式を迎えた。数年前から正之公が青年期を過ごした高遠に像を建立しようという動きがあった。具体的な取り組みが昨年始まり、関係者の理解と協力を得られて「像建立実行委員会」ができ、短期間に建立にこぎ着けることができた。

残雪輝く仙丈岳を背景に、肩流れの大屋根と正之公を祀る土津神社のある猪苗代町から送られ生長した赤松林のなかに像が建った。除幕式は200人以上の出席により仏式の除幕式で盛大に執り行われた。訪れる観光客からは「よくできています」「青年時代の真面目さと凛々しさがうまく表現されている」と評されている。あらためて正之公に寄せる関心の高まりと深さを感じさせられている。

この人物にスポットをあて、NHKの大河ドラマ化を実現して観光客誘致の一助にし、混迷する現代、正之公に学ぼうと、平成15年6月17日、合併前の高遠町が運動を起した。以来7年が過ぎようとしている。同時



保科正之公・お静・お静地蔵 (伊那市立高遠町歴史博物館庭)

に署名活動も始め、すでに35万人を超えて、数回NHKへ要請に出かけている。拡がりは伊那地方から全県・福島県・新宿区へと動き出している。20年2月12日には「全国組織名君保科正之公の大河ドラマをつくる会」が長野県・福島県・会津若松市・猪苗代町・新宿区・関係する未裔の方々を含め発足した。その後、伊那市議会・郡下の町村議会・県議会・国会議員の会による「応援の会」も立ち上げられた。夢の実現に向けて一歩一歩前進している。

さて、正之公は、江戸二代将軍秀忠と侍女お静との間に誕生した徳川



高遠町樹林寺にある保科正之公顕彰碑 (高遠郷土研究会建立)

家康の孫である。7歳で高遠藩主保科正光の養子となり成長した。26歳で高遠藩主から山形藩主へ、その後会津藩主へと移封を重ね善政を行った。41歳からは、江戸に出て約20年間甥の四代将軍家綱を補佐し「玉川上水の開削」「殉死の禁止」「口米の実施」などの人道主義施策を次々に実施した。姫路の池田光政、正之公より17歳後輩になる「水戸の黄門様」すなわち徳川光圀らと共に江戸時代の基礎を創ったのである。

今回は幸松(正之公の幼名)をいれ入れた高遠城主保科家について、考えてみたいと思う。

(伊那市立高遠町歴史博物館館長

北原紀孝

歴史今昔・今なぜ保科正之公か！

〈その2〉

保科家は、現在全国でおよそ3,500戸あり、1万人を数えると
いわれています。伊那の保科家は、戦国の世に北信から伊那市高
遠町藤沢郷へ移り住み、武田・徳川の勢力拡大とともに発展して
いきました。保科は巧みな処世術と戦国武士の気骨をもって徳川
家康に信頼され、譜代大名に上りつめ、江戸時代最初の高遠藩主
として君臨したのです。



保科家 北信より
伊那市高遠町藤沢郷へ

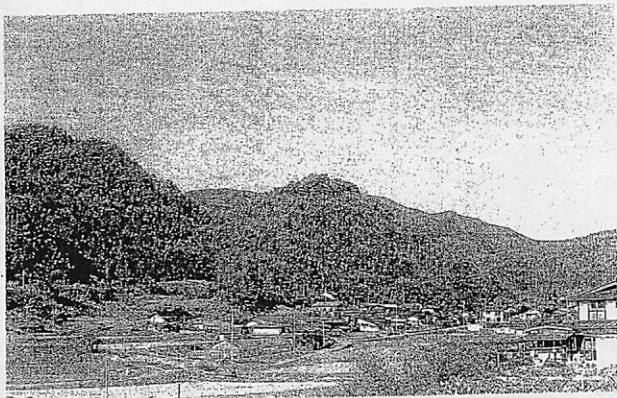
杖突街道に御堂垣外という集落がある。ここに藤沢城・地元では蛇山と呼ぶ城跡がある。これが保科家につながる城である。現在は道も整備され案内板もできて、山頂からは見事な谷筋を見下ろせる。

保科家は長享年中（1487年ころ）、現在の上信越自動車道「須坂長野東IC」から出たところの長野市若穂保科から藤沢に移ってきた。保科家の家紋は諏訪神社と同じ梶の葉と角九曜であるから、古くは諏訪とも関係があったと考えられる。戦国時代に北信の村上氏と対立し、移動してきた。

1545年、武田信玄が伊那を支配し、保科家も武田の支配下に属した。保科家は正則→正俊→正直→正光と続き、高遠・武田・徳川氏の元で家臣となつて活躍した。織田信長が天下取りのため武田領へと動きだしたとき、保科正直は飯田城を守っていた。天正10年（1582）2月14日、天竜川をさかのぼつて来た5万の織田軍と対抗したが、援軍にきた仲間との争いがおこつて混乱。敗走した。上田周辺に逃亡して時勢の動向を探ることになる。織田軍は3

月2日には高遠城で仁科五郎盛信を、3月11日には天目山で武田勝頼を破り、完全に武田領を手に入れたのである。その3ヶ月後、6月2日「本能寺の変」が起こり信長の百日天下は終わった。すると信濃は豊臣、徳川、その他諸大名が領地を奪い合う草刈場となつた。この時代、耕地は荒らされ、作物は敵方や隣人によつて強奪され、絶えず互いに殺し合いが行われていた。日本全体が貧窮と悲惨に陥っていた。このような時代に保科はいち早く徳川家康と手を結び、高遠を奪回したのである。この保科の判断行動は素早く見事であるといえよう。

天正13年（1585）正直・正光



藤沢城址（蛇山）杖突街道 御堂垣外



保科正直・正光の墓（高遠町 建福寺）

親子は真田攻めのため小諸に出陣した。この留守に松本の小笠原貞慶が5千の大軍を率いて高遠に押し寄せてきた。留守番役の「槍弾正」保科正俊は80歳に近かつたが指揮を取つた。この戦いを「鉾持棧道の戦い」という。高遠小学校の対岸断崖の山である。百姓や僧侶を動員して武装させ、この山から材木や石を落として混乱をおこさせ勝利した。少人数で勝利した痛快な戦である。この功績で家康より小刀と感状を賜っている。これが保科家の家宝になつている。そして、各地を転々としながら生き抜いてきた保科家が幸松を養子に迎えるのである。

次回は幸松の誕生である。

【伊那市立高遠町歴史博物館長

北原紀孝】

歴史今昔・今なぜ保科正之公か！

〈その3〉

探歴が 訪史い

保科正之公生誕400年に当たる2011年の大河ドラマは「江(おごう)～娘たちの戦国～」に決定した。江は正之公(幸松)の父秀忠の正室である。正之公に関係する人物に一步近づいたと考へたい。「天地人」も10年以上運動してのドラマ化実現だという。まず今は魅力ある正之公に近づき、現代を生きるヒントを学びたいものである。夢追い人の多からんことを！

〓幸松誕生！
武田信玄の娘たちが養育援助〓

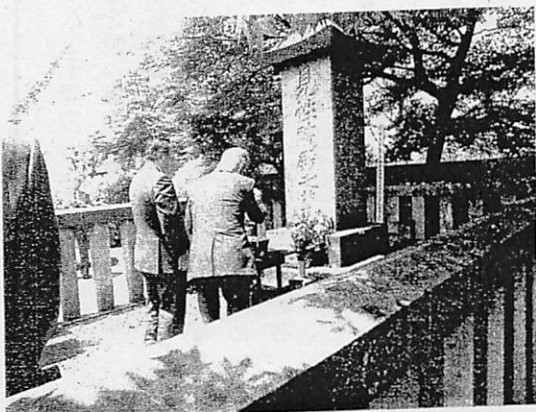
関ヶ原の戦い後、慶長16年(1611)5月7日、幸松の誕生である。母お静はかつての北条家臣の娘である。江戸城に入り乳母つきの侍女となっていた。そこで二代將軍徳川秀忠の目に留まり、寵愛を受けて幸松を身ごもった。誕生直前に氷川神社(現、埼玉県大宮市)にお静が願文を奉納している。

「うやまって申すきぐわんの事(略)ここにそれがし卑しき身として、大守(秀忠)の御思いものととなり、おたね(胤)をやどして、当四五月のころ臨月たり、しかれども、御たい(秀忠の正室)しつと(嫉妬)の御心ふかく、えいちう(城中)におることをえず、(略)かかお胤を身ごもりながら住所にさまよふ、神めいまことあらば、それがし胎内の御たね御男子にして、安産守護したまい、ふたりとも生をまっとうし、御うんひらくことをえ、大願成就なさしめたまはば、心願のことかならず違いたてまつるまじく候なり

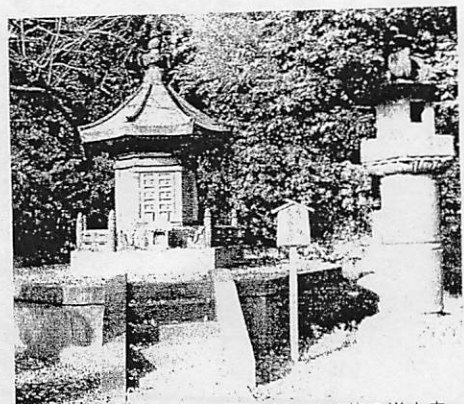
けいてう十六 二月 志津
お静は卑しき身で秀忠の子を宿したと卑下している。秀忠は嫉妬深い

正室江に気がねして、お静を城中では生活させなかつた。生まれてくる子は男であつてほしい、安産であつてほしいという母親の切々たる願いがくみ取れる。誕生した幸松を秀忠は、公には我が子と認めずにした。江の使わす刺客を逃れ、お静は幸松とともに、隠れるように不安な日々を送っていた。恐怖と不遇な環境のなかで母子の確固たる深い絆が結ばれ、逆境でも人を思う優しさの基本が形成されていった。

幸松3歳のとき、老中土井利勝は信玄の次女見性院に養育依頼をした。見性院は夫の穴山梅雪が家康と親交が深かつたので、夫亡き後も家康の庇護を受けていた。「我らも女にこそ生まれしも、弓矢取りては世にも知られし信玄が女なれば、



清泰寺(せいたいじ) 埼玉県さいたま市



2代將軍秀忠(台徳院殿)の墓 東京芝の増上寺

少しも御氣遣なし」と養育を引き受けた。見性院は、八王子に逃れてきた妹の信松尼(松姫)と母親お静と三人で幸松の養育に当たつたのである。3人の女性に護られ、素直で気配りができ、注意深く忍耐強い性格を身に付けていった。見性院には勝千代という子がいたが、幼少で昇天してしたので、幸松を武田再興の旗印しようと考えていたようである。見性院は埼玉県東浦和の清泰寺に祀られている。

毎年母の日に、見性院の法要が全津出身者でつくる「会津会」によって挙行される。今年はい伊那市から参列した。今でも見性院への恩義、先祖への敬愛の念を守っているのだ。次回は見性院の妹信松尼についてふれたい。

【伊那市立高遠町歴史博物館長

北原紀幸

歴史今昔・今なぜ保科正之公か!

〈その4〉

探歴が 訪史い

信玄の娘松姫(信松尼)は、姉の見性院とともに献身的に幸松養育に尽くしていたが、1616年4月16日、幸松6歳のとき54歳で没し、現在の八王子市の信松院に葬られている。奇しくも松姫の没した翌日、幸松の祖父徳川家康も74歳の一生を終えた。松姫は武田・織田滅亡後には剃髪し、織田信忠や武田家の霊を供養していたという。大河ドラマ「天地人」に登場する上杉景勝の室菊姫は松姫の姉妹である。

貞節な松姫と

八王子の織物産業

1567年、武田信玄がまだ健在のとき、松姫7歳と信長嫡男信忠11歳との婚約が調った。しかし、1572年に信玄と家康が三方ヶ原で戦った際、信長が家康に加勢したことにより婚約は破談となった。

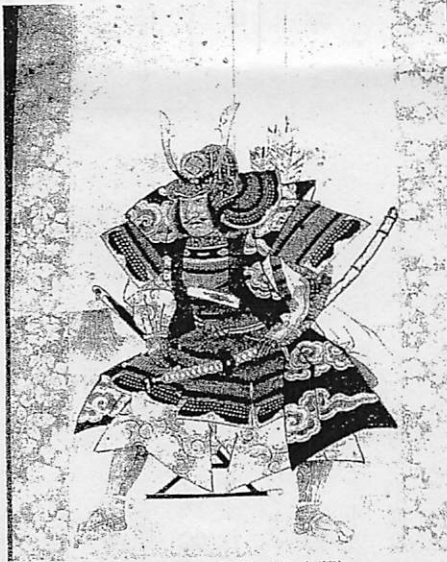
信玄が没し勝頼の時代に移り、織田軍が武田領に侵入してきた。松姫の婚約者であった信忠は5万の主力部隊を率いて高遠城に迫り、松姫の兄仁科五郎盛信と戦うという皮肉な廻り合わせになったのである。天正10年(1582)五郎盛信は迫りくる織田軍をまえに、妹松姫に武田家の子ども達を託し、部下とともに関東への逃亡を命じ、八王子へ逃げ延びさせたのである。3月2日の高遠城の戦い、3月11日の天目山の戦いで武田家は滅んだ。しかし織田の天下も「百日天下」で、同じ年の6月2日には本能寺の変で信長・信忠父子も没したのである。

その後天下を取る家康は度量が大きく、武田の残党を抱え込み、江戸の西八王子方面を守らせた。松姫は信州・甲斐から落ち延びてき

た人や八王子周辺の人々と力を合わせて蚕を飼い織物を盛んにし、八王子織物産業の発展に尽くしたという。この地は第二次大戦中、大量に絹のバラシユートを生産していたため爆撃にさらされた。幸いに松姫の葬られている信松院は大きな被害から免れることができた。

幸松は江戸城の比丘尼屋敷・浦和の大牧・人生の悲劇を背負いながら一生独身を貫いていた松姫の住む八王子などを転々と移動しながら、人の命の大切さや戦の虚しさを学んでいたのであろう。

父親の秀忠は5歳になっても烏帽子を授ける儀式も行わず、幸松は正式に將軍の子として認められずいたのである。母お静は目黒の成就院に幸松の身の安全と出世とを祈り願をかけ、お参りを欠かさなかつた。その寺には准胝観音、十一面観音



仁科五郎盛信像(個人蔵)



松姫(信松尼)

金剛願地藏、金剛幢地藏などの石造が寄進されており「お静地藏」とよばれている。幸松はお静・見性院・松姫の深い愛情のもと複雑な家族環境のなかでもじつと我慢しながら、子ども心に苦境に耐える忍耐力を身に付けていった。しかし、父秀忠の煮えきらぬ態度で父子会うことも叶わず、悲しみを味わいながらも愚痴をこぼさず悲しみを噛みしめ自分を強くする幹とし、悲しみこそ自分を支え強くする心境に至っていたのであろう。

見性院は、幸松を一人前の武士にするには男の手で育てねばと考え、高遠藩主保科正光の元へ養子に出すことになったのである。次はいよいよ幸松高遠への入場である。

〔伊那市立高遠町歴史博物館長

北原紀孝〕

歴史今昔・今なぜ保科正之公か！

〈その5〉

幸松が高遠で青年期の人間形成をスタートさせたのは、今から392年前の元和3年(1617)11月、甲斐信濃の山風が肌をさし、遠くの山に初雪が降り始めたころだった。村人達は冬に備えて収穫にはげんでいた。江戸をはじめて離れる7歳の幸松の素直な心は、旅路のはじめから、すべての体験を和紙が水を吸い取るように吸収していった。伊那高遠の自然と人々は2代将軍秀忠の子幸松を優しく迎え入れたのである。伊那市観光協会が中心となり、平成19年から毎年4月29日に高遠において「保科正之公生誕祭」が行われている。

探歴か 訪史いな

「義父正光を驚嘆させた
7歳にして分別を
身につけていた幸松」



高遠町藤沢御堂垣外本陣

見性院は「7歳からの育て方は実に重要な、自分の手元においてはしかなるべき侍の一人もつけてはさしあげられない。女童たちの中に育つては後々のためにならないから、何れかの家へ幸松様を預け替えすべきだろう。いざれお上(秀忠)とその御子たちとの親子・兄弟の名のりができると、心懸ける頼もしい人物に託したいものである」と考えていた。高遠の保科家は正光の祖父榎弾正正俊時代は信玄につかえ、父正直の時代には家康から本領を安堵され、家康の異父同母妹の多劫を継室(後妻)として迎えていた。正光は

このようにながりのなかで、律義に見性院のご機嫌伺いを続けていた。「御許の事は信玄の縁故を以て此尼(見性院)の様なるものをも捨置なき心柄は、此君(幸松)の為にも定めて誠実ならんと存じ斯く言うことなり、只今の間(しばらく)は御手前(正光)の子分になし置かれ、弓馬の道をもしろしめさるる(おしえてくださる)様にひとへに願ひ入る」(千載之松)と、秀忠の承知を得て見性院が正光に依頼し、幸松の高遠入城となった。

11月8日に江戸を立ち、通常5泊6日、55里の甲州路を旅してきたのだ。標高1,315mの金沢峠(千代田湖の上)を越えると蛇山の館が見え、戦国時代そのままに藤沢郷の谷筋を見下ろしていた。最後の宿場は御堂垣外である。宿泊する本陣では、幸松を迎えて秋の山の幸がいっぱい並べられていた。幸松が廊下に出たとき、「高遠には左源太さまが居なさるのに、跡継ぎどちらさまにするの」と女中達がささやいているのを聞いてしまった。幸松は「肥後守(正光)の許にては左源太と云う子あると聞く。然らば我等は見性院の許へ帰るべきなり」と分別ある筋を



左源太の墓(高遠町満光寺)

主張した。左源太は正光の甥であり、高遠へ遊びに来ていて養子縁組はしていなかった。正之は既にいる養子を差し置いて入城し、争いごとの火種をまいてはならないと考えたのだ。「7歳にして既に分別を身につけた人物」と義父正光を驚かせた。言い聞かせ納得させ、夜のうちにお城へも使者を使わし、翌日無事に入城したのである。あらかじめ用意されていた南曲輪の屋敷で生活をはじめた。母お静はこのとき34歳であった。遊び相手としてお静の親戚筋竹村半衛・神尾佐門と大牧を護っていた。寒風が忍び寄る高遠の地ではあるが、命を狙われるかわからない恐怖、江戸とは違い、安心してくらせる世を母子ともに感じはじめていた。次回は山河を駆け巡る幸松である。

【伊那市立高遠町歴史博物館長

北原紀孝

歴史今昔・今なぜ保科正之公か！

〈その6〉

今年10月、保科正之公を祭った土津神社のある福島県猪苗代町の区長さん約40人が、正之公の史跡を訪ねて来伊された。市観光協会や大河ドラマをつくる会の代表者が案内役を勤めた。署名活動をより活発に進め大河ドラマ実現をめざし一層協力しましょうと情報交換が行われた。猪苗代町は野口英世の故郷であり、猪苗代湖・磐梯山のある景勝地である。土津神社には高遠から送られた高遠コヒガンザクラも咲いている。一度は訪ねたい地である。



大自然と
人々から学ぶ若殿



東つづく城址 桜雲橋

時に穏やかに自然界の脅威と優しさを学ばせてくれた。間近に迫る野山の魅力のとりことなった若い感性は、身も心も豊かにしてく

幸松を迎えた高遠城は、標高800mの日本の屋根といわれる高地で、四季の変化が明瞭である。年間の寒暖の差が大きく、厳しさを強いられる土地である。ここには、さまざまな人間のもっている五感を総動員して生き抜かなければならない場所が広がっている。そんななかで幸松と仲間たちは、前からここに住む左源太に率いられ、目の前の月蔵山からはじまり天竜川まで四方八方の山野を跋渉した。藤沢川と三峰川の侵食した崖の上80mの城屋敷からは「嶽色江聲」のことばのごとく四季折々に彩りを変える東西のアルプスを眺められた。また両河川のせせらぎの音は雨や嵐の音とともに、時に激しく時に穏やかに自然界の脅威と優しさを学ばせてくれた。間近に迫る野山の魅力のとりことなった若い感性は、身も心も豊かにしてく

れる体験の日々を通じて磨かれ鍛えられていった。養父正光は、幸松と左源太二人の出世が成り立つように常に気を配っていたが、残念ながら寛永4年(1627)1月3日に左源太が病没してしまった。信州で育った自然児貴分死の死は、幸松の悲しみを誘い、友情や絆の大切さとともに人生のはかなさを学ばせた。遺体は高遠の満光寺に法名「法源院殿伝養隆相大居士」となつて葬られている。養父正光は保科家屈指の学者であり武功の者である井上市兵衛らを教育係に指名した。元和5年(1619)9歳になった時には、清廉潔白の土城代家老の保科正近を守役とした。正近は、以後山形・会津転封にも同伴し、常に身近にいて幸松を助けた。正近は没する前に「それがし拝領の知行4千石すべて返上つかまつり候」と遺言した知足の人物である。自分への拝領であるから子に譲ることはないと返上したのである。寛永3年(1626)16歳のころは建福寺の鉄舟和尚に禅や儒学を学んだ。また、天竜川において井上金右衛門から向井流の水泳法を学んだ。この泳法は会津藩にも伝わった。享和3年(1803)開設された会津藩校日新館の日本最古のプールとして知られる水練水馬池において藩士子弟がこの泳法で学んでいる。

山裾の城
下町高遠は
將軍の血筋
なるがゆえ
に幸松を丁
重にもてな
し藩あげて
祝福した。
杖突街道藤
沢郷の人々
は、大木屋(山梨県台が原の「七賢」の元という酒屋がスポンサーとなつて、貴船神社に伝わる祭礼に「こども騎馬行列」を加えて、幸松を騎馬に乗せ子ども達を引き連れて藤沢郷を練り歩くようにしたと考えられる。この祭りは、幸松が山形へ転封後も昭和の時代まで続けられてきた。今は高遠城下まつりなどのイベントにおいて高遠の小学生によつて続けられているにすぎない。



こども騎馬行列 高遠城下まつりにて

幸松は鉄舟和尚や知将たちから常に「お天道様にはずかしくないか!」と自然界の摂理や礼儀作法仁政を学んだ。四季折々に展開する農民の生きるための営みからも多くを学び、豊かな感情と感性をもち、謙虚で清貧な人格を身につけていったのである。次回は「仁科五郎盛信から学ぶ義の道」である。

【伊那市立高遠町歴史博物館長

北原紀孝】

歴史今昔・今なぜ保科正之公か！

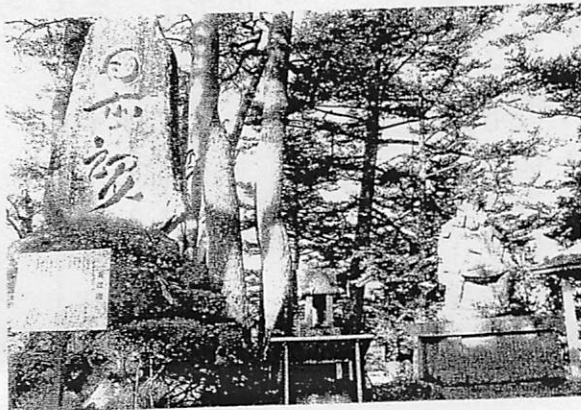
〈その7〉

NHK大河ドラマ「天地人」が終了した。上杉家のために尽くした直江兼統が没する2年まえに幸松（正之公）が高遠へ養子に入っている。当然、兼統は幸松の動静を知っていたであろう。幸松には後に会津藩主となり長女媛姫を米沢藩主の上杉綱勝へ嫁がせ、上杉家が断絶の危機にさらされたときには尽力し存続させている。これらは養育してくれた見性院やその妹上杉景勝夫人菊姫の子孫を助けたためだったのであろう。絆の縁を守ったのだ。



仁科五郎盛信から 学ぶ忠義の道

正之公は晩年58歳のときに、会津藩士の心がけを「家訓15ヶ条」として定めた。その第一条に「大君の義、一心に大切に忠勤を存すべく、列国の例を以て自ら処るべからず。若し二心を懐かば、則ち我が子孫にあらず、面々決して従うべからず」とある。將軍家については一心に忠義に励むべきで、他の諸藩とおなじ程度の忠義で満足してはならない。もし徳川家に対して逆意を抱くような会津藩主があらわれたら、そんな者は我が子孫ではないから、決して従ってはならないとした。この徳川家に対する忠義心こそは、正之公が高遠



仁科五郎盛信を祀る五郎山(高遠町勝間)

時代に教えられ学びとり人生の根本精神としたものである。

幸松が高遠に養子に入った元和3年（1617）は、「仁科五郎盛信」が織田軍と戦い高遠城で壮絶な死をとげた35年後だった。当時まだ戦いの様子は生々しく語り継がれていたであろう。幸松は高遠生活19年間の間に、何回となく「高遠城の戦い」の体験談や戦を物語る傷あとに触れたに違いない。「降参すれば、領土は安堵する。褒美の金子も与える」という誘いにもおらず、一糸乱れぬ統率のもと武田の威信を背負って戦った。屍を城に残して、名を後世に残した。この若武者とともに戦った小山田備中守・渡辺金太夫・諏訪勝右衛門等の戦いの様子も保科民部や鉄舟和尚から聞かされ、大将のあるべき姿を学んだ。その戦場の上日々暮らしていた幸松は、忠孝の精神を武田の武將の姿から学び取り、脳裏に深く刻み込んだ。兄勝頼が高遠城をまかされた盛信が高遠を守り武田家に尽くす姿は、後の正之公が兄家光の依頼にこたえて江戸に出て甥家綱を補佐し徳川家に尽くす姿と同じである。この忠義心は山形・会津と転封しても、保科から松平へ改名されても、貫かれた。家族や自藩よりも徳川家こそ守るべき最大のものであるという生き方が、戊辰戦争まで貫か

れたのである。

幸松は礼儀正しく清濁合わせもつた凛々しい青年に成長した。21歳になった寛永8年（1631）10月7日、養父保科正光が71歳で没し高遠城主を継ぎ、同月27日養父正光の一字をもらい正之と改めた。翌年実父秀忠が54歳で没し、異母兄家光の跡となった。城主となり家光に信頼されるようになった正之公は、26歳で高遠から山形への転封を命じられたその前年、秀忠没後剃髪し浄光院、名のついていた母お静も52歳で没し長遠寺（現蓮華寺）で葬儀が執り行われた。

今回は「有史以来の伊那人の太動・正之公山形入り」である。

【伊那市立高遠町歴史博物館長

北原紀孝



高遠郷土研究会によって建立されたお静の墓(高遠町樹林寺)

歴史今昔・今なぜ保科正之公か！

〈その8〉

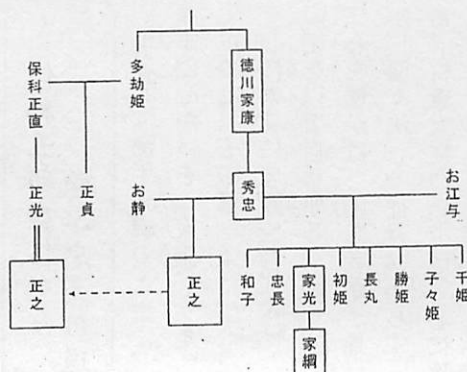
転封とは、諸大名の領地を他へ移し替えることで国替のことである。正之公は高遠から山形、その後会津へと転封を重ねた。この転封には領民をともなっていくのが習わしであった。当時1万石でおよそ70人の武士を抱えていたという。高遠藩は当時3万石だから210人の武士がいたことになる。転封先の山形は20万石だから単純に計算すると1190人が不足となるわけである。そこで正之公は氣心の知れた伊那人を武士に取り立てながら多数連れていった。



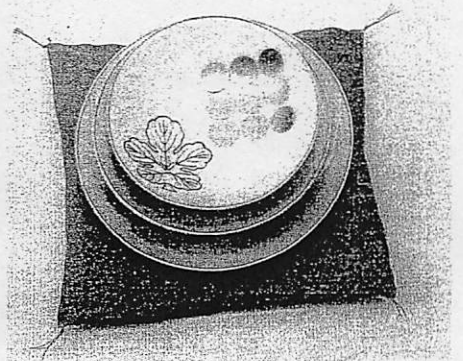
有史以来の 伊那人の大移動

家光が3代将軍職を任されたのは19歳のとき、元和9年（1623）だった。このとき異母弟正之公は13歳で、天竜川で夢中で水練の手ほどきなどを受けているころだった。家光が正之公の存在を東京目黒の成就院の僧から知らされたのは寛永8年（1631）12月ごろだと考えられる。正之の異母兄忠長は家光の同母弟で、家光と2歳違いであった。忠長は欲張りで家光を敬う姿勢がみえず將軍を援助しようとせず、高崎藩へ塾居（謹慎刑）を命じられ、寛永10年（1633）27歳で自害した。家光は、忠長とは違い慎重深く礼儀正しく、苦難を克服して忍耐力を身につけてい

【保科正之と徳川家の関係図】



た弟正之公を知ると、急激に結びつきを強めていった。家光は諸法度・参勤交代などの制度を整え、鎖国を断行して戦のない政治の基礎固めをし、家康・秀忠の創業の意志を継いで幕府政治を整えていった。これを支えていたのが正之公である。寛永14年（1637）九州に起こった天草四郎のキリシタンの乱は身分制社会を否定するものであり、幕府の不安材料となっていた。そんなとき、「最上は古来、奥州の抑えの重要な土地である、周辺の不時に備えて厳重に警戒せよ」として山形への転封を命じられた。この転封にもなつて多くの伊那人たちが武士に取り立てられたりして、家族をも引き連れて大移住したのである。農民のみならず大工・鍛冶屋・弓師などの手工業者たちも移住した。移住は現代の感覚でいえば海外移住以上の大決断であったであろう。残る者も移住する者も両者が成り立つように大家族会議が行われたろう。領民に信頼されていた正之公ゆえ家族のなかでも優秀な人物が同行するように配慮されていたと思われる。高遠の歴史家故北原通男氏は「有史以来の伊那人の大移動」と著書で表現している。信州の地形や気候との違いに戸惑いながら、新しい環境に適応し、新旧の生活習慣を融合・変革しながら新地



小原庄助使用の杯（高遠町歴史博物館に展示）

で生きていくのはたいへんなことであつたらう。そんななかで伊那地方の食生活を継承し伝えて今に残る典型的なものが、味噌と大根おろしでツユをつくり食べる「高遠ソバ」であり、「天ぶら饅頭」である。このとき移動していった人々のなかには会津民謡で有名な「小原庄助さん」の先祖や保科民部・瀬勘兵衛・北原采女・田中三郎兵衛・篠田半左衛門等がいて、家老などを務めている。正之公は母お静の葬儀を執り行った長遠寺の僧日蓮をも移住させ、本春山浄光寺を建設開祖し、浄光院殿（お静の戒名）の菩提寺とした。白虎隊で自害した人たちの多くは山形・会津と、この転封に同行した人々の末裔である。

次回は山形における藩政と白岩騷動馬見ヶ崎川堤防工事くに触れたい。

【伊那市立高遠町歴史博物館長

北原紀孝】

歴史今昔・今なぜ保科正之公か！

〈その9〉

正之公には養父正光が乱心者と決めつけた叔父正貞がいた。正光の後高遠城主を継いだ正之公は、寛永14年(1637)飯野藩(千葉県)の藩主となっていた正貞に保科家の家宝を譲り渡したのである。家康より拝領の感状と「包永の刀」、保科正俊が武田信玄から贈られた「基重の刀」などを渡している。贈られた正貞は非常に喜び、使者の北原采女に刀を贈りもてなしたという。正之公は保科家の血筋を引く正貞が継ぐべしとしたのである。全国を視野に入れた幕府の立場から物事を発想し行動する姿勢に飛躍したのである。



白岩騒動と馬見ヶ崎川大堤防工事

山形藩主となり27歳になった正之公は、家老や老中という役職は与えられなかったが、家光の最も信頼する弟となっていた。自他ともに、水戸や尾張の御三家よりも幕政に関わるようになり、第四家保科として家光の「形」に対して「影」の存在となっていた。

山形で最初の課題は、寛永15年(1638)天領白岩村の農民が租税の軽減を訴えて起こした百姓一揆であった。前年、九州に島原の乱が起こり、肥前島原城主松倉長門守勝家は領内のキリシタン宗徒益田四郎時貞(天草四郎)を首謀者とする信徒に苦しめられた。この乱を治めるために正之公の出陣も検討された経過もあった。6月、白岩村の36人を独自の判断で磔に処した。元和元年(1615)全国に発布された武家諸法度には「隣国において新儀を企み徒党を結ぶ者これあらば早速言上致すべき事」とあった。これは、まず



正之公が残っていた貴船神社の山車(高遠町歴史博物館展示)

幕府に報告せよということだったのである。島原の乱後「国家の大法制を犯し、凶逆のふるまいせるやからあらんには、隣国の輩速やかに馳せむかい討伐すべし」となっていた。正之公は12月参勤のため江戸へ到着し、兄家光にこの件を報告すると「大政に参与することにはばかることなからえ」と非常にたのもしげなら、補佐役になったのである。天草の一揆が西国に拡がったのは、身を挺して国事に尽すものがいなかったためだ。およそ国に尽くそうとする者は、迅速に異変に対応することが善であると実践したのである。

正之の最上時代は7年間であったが、正之公は厳正公平で悪を憎み善を愛し、善功者および孝行者には恩賞を与え表彰している。寛政20年(1643)暴れ川の馬見ヶ崎川の治水工事をも完成させている。延長2万2千以上の川で、広い河川敷をもっていた。蔵王から流れるこの川は毎年氾濫して百姓を苦しめていた。ここに7千6百にわたる堤防工事を行い、耕地を確保したのだ。高遠時代に日本屈指の急流三峰川や天竜川で霞堤防工事や石積み、水路を変える木組み工事などを見聞していた。これらに奮闘している領民の姿から水を支配し統治することの重要性を学んでいたのである。



さくらホテル横のB&G高遠海洋センターの「水六訓」

洋の東西を問わず、水を支配することは為政者の第一の仕事だと体験から学び肌を沁み込んでいた。これがこの工事に生かされ、後の玉川上水工事につながっているのである。この工事は自分の藩の労働力だけでは足りなかったため、他藩からの動員も許可された。これも正之公が幕政の中核にいて権力を動かすことができたからである。

正之公の去った高遠においては重税に苦しむ領民が「いまの高遠でたてられようか早く最上の肥後さまへ」と、白をひきながら歌ったという。領民のなかには鍋・釜のみを背負って、着の身着のまま山形へ流れ込んでいくものもいたという。

今回は「33歳で会津若松へ転封」である。

【伊那市立高遠町歴史博物館長 北原紀孝】

歴史今昔・今なぜ保科正之公か！

〈その10〉

会津盆地は猪苗代湖の恵みを得て肥沃な広野である。神のごとく見下ろす磐梯山は、正之公が青年期を過ごした伊那の地を思い出させるに十分な山であったろう。お家騒動で混乱し幕府のお荷物となっていた藩を、1643年正之公33歳が預かることになったのである。会津へ転封を命ぜられ、高遠以来の武士たちと左京衆（山形からの家臣）の大集団を引き連れて転封した。会津藩は23万石の地というのが公式の藩の石高であった。



藩士の育成と 社倉の創設

「預しめ、命じて曰く、之を処置すること封地と同じくすべし」と（松平家譜）会津南部の土地5万5千石は天領であるが、会津で預かり藩の領地としてよいということである。これで実質28万5千石所有の藩となったのである。これは水戸藩25万石に気を使い、水戸より多くするとなると都合が悪くなる心配があったからなのである。しかし、実質は將軍家光が正之公に御三家以上の信頼を置き配慮をし、期待をもっていた証明である。



会津磐梯山 野口英世記念館より

さて、「天地人」で昨年にぎわった会津上杉景勝の時代は、正之公が会津へ入場するより約50年以前のことになる。景勝の正室は菊姫で、正之公を江戸で面倒をみてくれた見性

院・松姫の妹である。織田信忠と高遠で戦った仁科五郎盛信の妹でもある。1582年（天正10年）6月本能寺の変で信長亡き後の豊臣時代から徳川にかけての混乱期に菊姫は伏見城で人質となり暮らしていたが、そこで没している。徳川の天下となり、上杉は1601年（慶長6）に出羽米沢へ転封となった。その後会津は蒲生・加藤氏を経て保科正之公の入城となったのである。加藤氏のお家騒動により村々は乱れ、離農流民化が続いていた。正之公は入城してすぐに、「一つ喧嘩口論の事、一つ押買い狼藉ならびに賭博類の事、一つ当所他国の者によらず切支丹（キリスト）の宿致すの事付けたり何者たりといえども怪しき輩身通し候事、一つ山林寺社在家等へ乱入して竹木を伐採せしむる事、一つ旅人を煩わせ往還を滞らしむる事、右違背の輩は速やかに敵科に処すべき者也」と最初から立て札を掲げ、施政方針（今でいうマニフェスト）を明らかにしたのである。ここにも問答無用の武力政治から人道主義を基本とする文治政治へと変えようとしたことが伺える。牛裂きの刑・釜煮の刑など野蛮で残酷な処刑は禁止した。1661年には幕府に先んじて殉死を禁じた。軍法・軍禁・家中掟・道中掟などの浸透を徹底させた。正之公



会津若松城

の元には多数の武芸者が集まり互いに切磋琢磨し、後になって新撰組も指揮する武士達が江戸時代を通じてこの藩で育っていく基礎がつくられたのである。また、朱子学を学んでいた正之公は、中国の隋（遣隋使のころ）の国で実施されていた「社倉制度」を実施したのである。社倉とは、飢饉のときなどに貧民を救うために設けた米蔵のことである。普段から米を出し合って貯めておき、救財につかうのである。1655年から諸藩に先駆け実施した。人民の安全安心の社会を作り出し、安心して働けるように、民政・農政の重要な柱となる制度としたのである。

次回は兄家光の死と4代將軍家綱を助けて江戸へ！としたい。

【伊那市立高遠町歴史博物館長 北原紀孝】

歴史今昔・今なぜ保科正之公か！

〈その11〉



正之公が41歳になったとき3代将軍家光が亡くなり、臨終の床で「わが子家綱は11歳で心もとない不運な子である。われも先代秀忠も將軍職を引き継いだときには親が健在であった。しかし、われ亡き後家綱には親がない。正之、貴殿が親代わりを勤め立派な將軍に育ててほしい」と懇願されたのである。「畏まって候 ご安心なされ」と即答した。これが世にいう「託孤の遺命」だ。家光はこれを聞いて安心して没したという。このときから20年間会津に帰らず江戸城に住んで4代将軍家綱を補佐し、幕政を左右するようになったのである。今でいう県知事と内閣総理大臣第一補佐官を兼任したのである。

「四代将軍家綱をたすけ江戸づくりにくく
…玉川上水と明暦の大火…」

正之公は信頼して助け合ってきた47歳の兄家光を失った。これにより甥家綱を、酒井忠勝、松平信綱らと補佐するために江戸詰めとなった。会津は北原光次、田中三郎兵衛らに任せて江戸に出た。このころは幕府体制の確立期で課題が多く、いろんな矛盾も出ていた。秀忠・家光時代に改易（領地・家屋敷を没収）されたものは、外様（関が原の戦い以後徳川の臣下）大名52人、徳川一門ないし譜代（関が原の戦い以前から徳川の臣下）大名が26人、計78人であった。石高にすると400万石に達していた。改易によって生活不安になり貧窮する武士階級が大勢発生していた。1651年家光没後まもなく油井正雪が首謀者となり政治に不満をもつ旗本・浪人たちが倒幕を



日本最大の石碑土津霊神の碑
(猪苗代町土津神社)

企てた。この事件を慶安事件という。密告により発覚し、丸橋忠弥らは磔にされ、正雪は自害してこの事件はすみやかに終息した。

1590年小田原落城後、関東を任された家康は広大な平野に人々の生活の場を拡大していった。正之公は人口を支えていくには「水を確保することこそ第一の事業だ」と強い認識をもっていた。さまざまな反対を押し切って、1653年1月13日玉川上水の開削が実施に移された。そして1654年6月20日武州羽島（多摩川の上流から江戸城の大木戸まで41キロにおよぶ水路が完成した。この完成により江戸の飲料水は満たされるところにも、この水利によって40余の新田村ができ、武蔵野台地は豊かな食料供給地に変貌した。大都市江戸の発展の基礎ができたのである。

明暦2年（1656）江戸に大火がおこり、約10万人の死傷者がでた。

これを「明暦の大火」とよんでいる。このとき正之公の執った処置がみごとであった。火災の最中「飢えた者は浅草蔵前の火を消して蔵の米を持ち出せ、その米は勝手次第」とお触れを出した。これにより窮民は火消役となり、蔵米は飢えた人々の救助米に転じて一石二鳥



会津の藩校「日新館」（会津若松市）

の効果を発揮した。浅草の火はいちはやく消えたという。この時、正之公は将軍家綱について安全を確保していた。幕閣のなかには「江戸城外に將軍を避難させよ」との意見もあったが、混乱に乗じて反幕勢力が何を起こすか分からないため警戒して城内にいたのである。この火事で5層5階の独立式江戸城大天守閣も焼失してしまった。後に再興の動きがあったが、正之公はこの大事に金のかかる天守再興は必要ないとして再建しなかった。住民の生活の安心と安全を優先し、ご金蔵を解放して住民に与えたのである。今でも当時の天守閣の石組みだけは皇居内に残されている。

今回は「家訓」とする。

【伊那市立高遠町歴史博物館長

北原紀孝】

歴史今昔・今なぜ保科正之公か！

〈その12〉

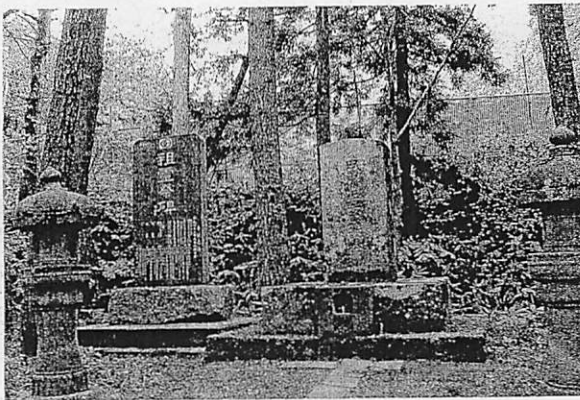
旧高遠町は会津若松市と「親善交流提携」書を交わし交流してきた。合併し伊那市として改めて調印式が今年4月15日に市役所でとりおこなわれた。その折、高遠城址に桜の植樹が、小坂・菅家両市長の手によって行われた。今後の積極的な交流が期待される。

昨年夏、会津若松市子ども育成会連絡協議会の小学生が高遠城址を訪れ、高遠小学校の児童と交流した。そのとき、「ならぬことはならぬものです」の「什の掟」を現代に合うように変えた「会津子宣言」が本丸で披露された。子どもたちに受け継がれている伝統のパワーを再認識させられた。



その国の青年を見れば、
その国の将来はわかるという、
「会津藩十五ヶ条の家訓」と「什の掟」

一つ、年長者の言うことに背いてはなりません。二つ、年長者にはおじぎをしなければなりません。三つ、嘘を言うてはなりません。四つ、卑怯な振舞いをしてはなりません。五つ、弱いものをいじめてはなりません。六つ、戸外で物を食べてはなりません。七つ、戸外で婦人と言葉を交わしてはなりません。八つ、ならぬことはならぬものです。これが「什の掟」である。藩校「会津日新館」入学前の子弟に教え込まれたのである。これは、正之公が58歳のとき寛文8年(1668)に家老田中正



大家老の田中正玄の墓 猪苗代

玄の提案でつくった「会津藩家訓十五ヶ条」の流れをくむものである。「家訓」は文天祥(1236~1282)(中国南宋末の忠臣・元に捕らえられ獄中で「正気の歌」を作った)の精神世界の影響をうけている。文天祥は、正気とは「浩然の氣」のことだとして、その底には



保科正之公の墓
猪苗代町土津神社奥の院

万物に「氣」が宿るとする世界観がある。正気の歌は「天地、生氣あり、雑然として流形に賦す。下はすなわち河嶽となり、上はすなわち日星となる。人においては浩然と曰い、時窮しては節すなわち見れ、一丹精に垂れる(混乱のときには士節を尊ぶ一群の人々があらわれて歴史に名を残す)である。これを学んでいた正之公は学問の師である朱子学者兼神道家である山崎闇斎に命じてまとめさせた。「家訓」の第一項には、大君の儀、一身大切に忠勤を存すべく、列国(他の藩)の例を以つて自ら処るべからず。若し二心を懐かば、則ち我が子孫にあらざ、面々決して従うべからずとある。つづいて、二、武備は怠るべからず士を選ぶを本となすべし上下の分乱るべからず。三、兄をうやまい弟を愛すべし。四、婦人女子の言は一切聞かべからず。五、

主を重んじ法をおそるべし…と続く。そして、十五ヶ条の旨堅く之を相守り以て往もつて同職の者に申し伝うべき也と結んでいる。会津日新館で教えられる「日新館童子訓」も含め「義」と「敬」の精神を尊ぶ倫理観が確立される流れができ、徳川將軍家に対して最後まで忠節を尽す藩となった。司馬遼太郎は「…三百にちかい藩のなかで肥前佐賀藩とともに藩士の教育水準がもつとも高く、…藩士の制度という人間秩序をみがきあげたその光沢の美しさにいたつてはどの藩も会津にはおよばず、この藩の藩士秩序そのものが芸術品とすらおもえるほどのものである…」と述べている。白虎隊もこうした社会制度のなかで育てられたのである。

次回は三大美事にふれる。
【伊那市立高遠町歴史博物館長

北原紀孝】

歴史今昔・今なぜ保科正之公か！

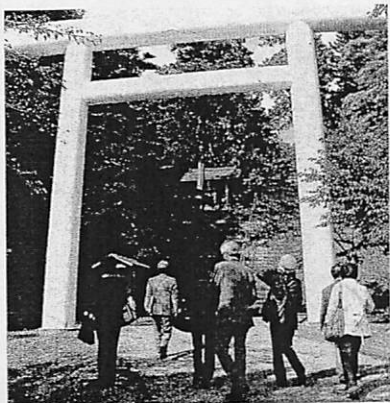
〈その13〉



正之公は幼少期江戸において生命の尊さと辛抱を学び、高遠において友達や家臣たちから自然の摂理と仁政の何たるかを学んだ。山形においては藩政からさらに幕政をも視野に入れての仁の政治を学びとった。さらに、会津藩主となってからは徳川御三家に次ぐ家柄として將軍を支え、まさに日本全体を視野に入れて戦のない文治国家の建設のために尽力した。この時期にヨーロッパの絶対君主国家は地中海から大西洋・太平洋へと商業圏を拡大し、日本へも押し寄せようとしていた。

民の安全・安心とはなにかを
問いつづけた正之公
「大名証人(人質)制度を廃止」
「殉死の禁止」「大名承認制度の緩和」

慶安4年(1651)10月7日、江戸において「大名承認制度の緩和」、別名「末期養子の禁の緩和」を実施した。これまでは、大名、旗本・御家人の当主が死亡した後に、家臣が跡継ぎ養子を願い出ても家督相続は認めないと定められていた。これは願い出された養子が死亡した当主の希望に叶う人物かどうか確認できないからということであった。しかし、江戸初期家康・秀忠・家光の代に相次いで改革(領地屋敷を取り上げられること)廃絶が実施され、その結果大量の浪人(職業のない武士)が発生し、社会不安の原因を起こしていた。正之公は、上杉謙信につながる名家上杉綱勝に娘を嫁に出していたが子がなく、綱勝は27歳で養子を定めず死亡した。そこで上杉家は断絶の危機にあった。



土津神社の大鳥居 会津猪苗代町

この折正之公は存続のため吉良三郎を養子に指名し、一方で吉良家との「養子縁組の届けを幕府に出し忘れていた」のは怠慢であるとして、米沢藩上杉家30万石の石高を減じて15万石として断絶の危機を救済した。正之公の気配りと懐の深さ、慈悲の心の深さに感歎させられるのである。このような苦肉の策によらずに、安心して相続が円滑にできる世の中を目指し、この法を制定したのである。

寛文3年(1663)5月23日に武家諸法度を改定して「殉死を禁止」した。この時正之52歳であった。会津においては、城代北原采女、家老井深茂右衛門のもとで既に寛文元年(1661)8月6日に禁止令が実施されていた。水戸家の光圀(黄門様)も正之公も、この風習は戎狄(野蛮人)の風習で、最近主君のために殉死することの多きをもって誇りとする風潮があるが、国家有為の人材の損失につながり、政治のつながりに支障をきたすとして禁止していた。御三家光圀の影響力もあったが輔弼役(將軍の政治を助ける役)を任されていた正之公の果たした役割は大きかった。

寛文5年7月13日「大名証人制度が廃止」された。証人とは人質のことで、大名は主だった家来や正室を人質として裏切らない証として江戸



家老井深茂右衛門の霊社 土津神社境内

に住まわせた。戦国時代から続く人質政策である。織田信長から徳川家綱までこの風習は続いてきていた。世の中は武器で威圧する武断政治から法による文治政治に移行するにしたいが、諸大名から人質を取っておく必要がなくなってきた。正之公が普段から廃止といつていたことが將軍から直接大名たちに言い渡されたのである。諸大名たちはありがたいことだとして、直ちに国許へ連絡し、たいへん喜ばれたのである。

人民の安全・安心を先取りして実施に移そうとするその見識に現代の我々も学びたいものである。これが家綱時代の「三大美事」といわれるものである。

今回は正之公の家族構成についてふれたい。

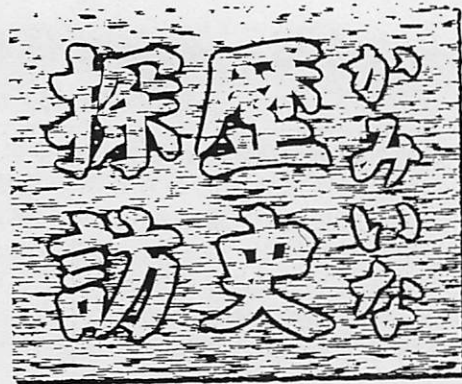
【伊那市立高遠町歴史博物館長 北原紀孝】

6月号本文1段目の田中正玄の読み方は「まささる」の誤りでした。訂正いたします。

歴史今昔・今なぜ保科正之公か!

〈その14〉

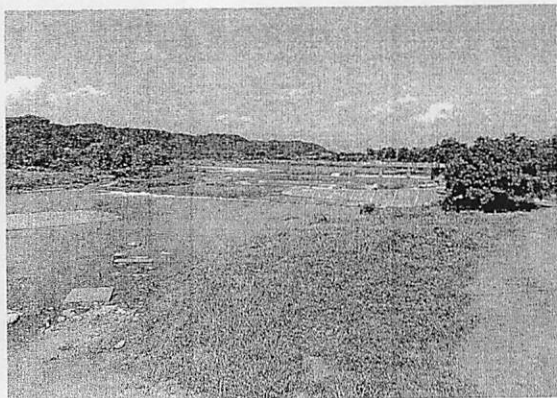
NHK「龍馬伝」はいよいよ後半に入った。この龍馬伝を大河ドラマに取り上げた1つの理由は、世界的閉塞感のなか「チェンジ」を旗印に登場したアメリカ大統領オバマの動向に注目しているとき、日本においても江戸時代の変革をめざした龍馬の姿に注目し、人物像に迫ろうということであったようである。変革のマニフェストはこへやら、国民の期待するものをキャッチできない政治家集団に失望しているのは小生のみではなからう。今こそわが身を捨てて、人民の幸せを優先させた正之公の精神に学んでもらいたいものである。



家訓第四条「婦人女子の言、一切聞くべからず」
正之公と15人の子ともたち

現代の社会常識からいえば、かなりかけ離れた掟である。正之公が会津の憲法ともいえる家訓のなかにこの一条を謳わざるをえなかつた理由の1つは、娘の毒殺事件からきていると思われる。

この事件は、1658年（万治元年）7月28日正之公が47歳のときに、長女媛姫が18歳で変死した件である。これは家訓が制定される10年前の事件。媛姫の生母で継室となつていたお万の企みが裏目にでたものである。正之公の四女松姫は身分の低い側室お塩が生んだ子であつたが、加賀100万石の前田綱紀に嫁ぐことに



玉川上水の取り入れ口

なつた。そこで、お万は自分の生んだ媛姫よりはるかに石高の大きい前田家に嫁ぐのを嫉妬して毒殺を企んだのである。老女の三好と玉井を使つて松姫の膳に毒をいれたところ、松姫付きの老女野村がその膳を置き換え、そのために媛姫が毒入りの膳を食して3日後に変死してしまつたのである。この事件によつて、医師10数人が斬罪切腹を命じられ、関係者70余人が処罰されたという。

媛姫の夫は30万石上杉綱勝で、その6年後27歳で世を去つている。正之公は、このような経緯のなかで既に記述した上杉家の存続に尽力したり、家訓に記載することにより戒めとしたのだと考えられる。媛姫の墓は、上杉家菩提寺米沢の林泉寺にあり「会津婦人」として祭られている。前田家に嫁いだ松姫も9年後19歳で病没した。正之は正室・継室と側室3人の間に6男9女を儲けた。子どもたちは3代藩主となつた正容を除いて全員が早死にし、平均寿命はわずか15歳弱であつた。

正之公最初の結婚は23歳高遠藩主のときで、磐城平藩（現在の福島県いわき市）7万石の内藤左馬助正長の娘16歳の菊を妻とした。後に高遠藩主となる内藤家とは同族となる。菊は翌年男子を産み正之公と同じ幼名「幸松」と名付けたが、菊はその3



羽村市郷土博物館内の復元水門

年後に20歳で没し、幸松も5歳で早世。母子ともに短命であつた。その後正之は側室のお万の方を継室として4男5女を儲けた。会津藩主2代目正経は四男でお万の子であつたが36歳で没した。その後を継いだのは異母弟で、側室お富貴の子正容で六男である。このときに保科から松平に姓を替え、63歳まで生存した。

薄命であつた最初の妻と長男のことは忘れがたかつたであろう。これらを見る限り家庭的には恵まれたとはいえず、こういったことが生きるには如何なることかという命題に執りつかれ、朱子学・神道の学問の道に没頭させた。諸書の編集や日本3大藩校といわれる「日新館」を創りだす会津の精神文化の土壌を形成していったのであろう。

次回は正之の教養について触れてみたい。

〔伊那市立高遠町歴史博物館長

北原紀孝〕

歴史今昔・今なぜ保科正之公か！

〈その15〉

来年の大河ドラマ「江～姫たちの戦国～」に続いて、2012年は「平清盛」に決定した。当地の保科正之公を大河ドラマにする会の署名活動も地道に一步一步前進して40万人を越えた。伊那から正之公終馬の地会津へ研修旅行をと、一層の関心と広がりを見せている。過日の講演会で、ジェームス・三木さんは、「喜怒哀楽」の人間模様が強調されないでドラマになりにくい」と言っていたが、左源太没の原因、姉妹の毒殺事件、白岩一揆など描くべき模様は多々あると思う。



茶道にも和歌にも

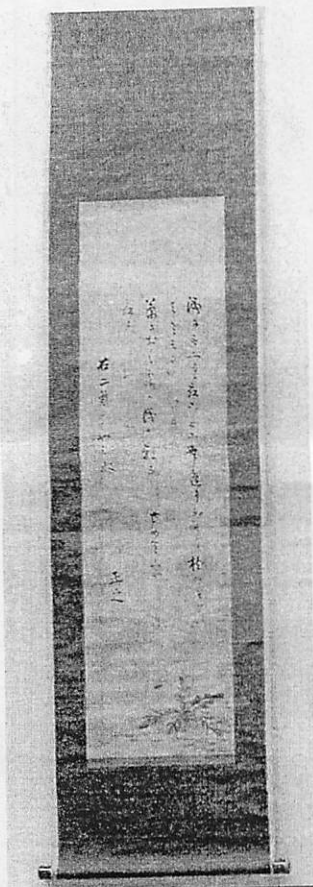
秀でた正之公

「曆の改正にも便宜」

会津若松城内に「麟閣」といわれる建物がある。1591年(天正19)、茶道の祖千利休は、秀吉の怒りにふれ自刃した。麟閣はそのとき会津藩主蒲生氏郷が、千家が絶えるのを惜しんで、その子少庵を会津にかくまったときのものである。江戸時代になり徳川家康は、武家の茶道として遠州流を興隆し、小堀遠州を將軍家の茶道指南役とした。遠州は生涯400回あまりの茶会を開いた、招かれた人々は大名・公家・旗本・町人などあらゆる階層に及んだという。書画、和歌にもすぐれ、「綺麗さび」という幽玄・有心の茶道をつくりあげた。保科正之公も小堀遠州に師事し、会津にも遠州流と石州流の両派が広まるもとをつくった。日本の町人文化が台頭してくる近世初頭の明るい美意識の世界へ誘われていった

のである。

1635年(寛永12)正之公25歳のとき、母お静(浄光院)が高遠で亡くなり、長遠寺(現蓮華寺)で葬儀がおこなわれた。母を失った悲しみが夜ごとに思い起こされる心境をみごとに表現している和歌「涙にもくるゝ夜ごとに野辺にふせる 枕のものくさの露けき」草におく露か涙か朝なくく さめてくやしき夜なぐのゆめ」が残されている。晩年、正之は神道に深く傾倒し、吉川惟足とも交流していた。1672年(寛文2)8月、自分の永眠の場を求めて、猪苗代に行ったとき「万代といはひ来にけり会津山 たかまの原のすみかもとめて」と詠んだのに対し、惟足も「君ここに千とせの後のすみどころ 二葉の松は雲を凌がんと」と詠みこの地に決め、後ここに土津神として祭られることになったのである。また、正之公は囲碁の名手でもあった。徳川家お抱えの碁院の一つ安井家二世算知とは好敵手で、下屋



保科正之公の和歌



「麟閣」会津若松城内

敷に住まわせて庇護していた。あるとき「我が子算哲は本業の碁をおろそかにして天文・曆術を勉強している困っている」と愚痴をこぼした。正之は「わが国の曆は宣明曆を用いているが、とかく天象(天体の現象)と食い違っていて皆困っている。曆の不備を正せば世のためになる。力になろう」と言われ、算哲の研究に便宜を図り、1684年(貞享二)徳川光圀公の応援も得て「貞享の改曆」となった。算哲は渋川春海と改名して、改曆の功績によって幕府の天文方を命じられて、子々孫々これを継いだ。正之公は政治のみならず、学芸文化振興の面でもさまざま活躍をしている。

今回は最後としたい。

【伊那市立高遠町歴史博物館館長

北原紀孝】

歴史今昔・今なぜ保科正之公か！

〈その16〉

正之公は50歳をすぎて眼を患いながらも幕府の重鎮として活躍していたが、寛文12年(1672)11月22日、多くの人々から惜しまれながら62歳で歿した。家康・秀忠・家光・家綱の四代に関わりをもち、戦のない江戸時代を構築する重要な牽引役を務めたのである。將軍を頂点とする国・修身齋家治國平天下の儒教的世界と、天照大神の國・神道の世界は矛盾することなく共通すると捉えられていた。晩年土津神の称号を得て猪苗代町見弥山の地に神として祭られた。正之公以後の会津藩主も多くが神式によって神として祭られ、会津若松市東山の松平家院内御廟に祭られている。



知足の人・清廉潔白の人、
オンリーワンの生き方
〜歴史再発見の旅〜

苦難と挫折は宝物であるといわれる。これを体感しプラス思考にしたのが正之公であるといえる。7歳までの江戸の幼少期のいつ命を捕られるかわらない恐怖と苦難の時を経て、その後人生の約三分の一にあたる19年間を伊那高遠で過ごしたのである。26歳で最上藩へ移封までの間に得た知識と体験が、知足の人、清廉な士という人格をつくりあげたのである。家光將軍の弟として、家綱の叔父となつて、幕政に参画したが、決して將軍を超えることはしなかった。

「正之(家綱の)補佐の任に在る時、大政に係わる建言、及び処置する所の書記(記録)悉く之を焼く。故に重臣と雖も(正之がどのような政策を立案したかを)知らざる者多し」と会津松平家譜にある。晩年、自分の足跡を抹消することによって、幕閣の争いの火種を取り除き、安泰を願ったのである。さまざまな政策において「おれが提案し実行したものだ」と誇らしげに語る政治家ではなかったのである。

現代世界を見ると、イスラエル・アフガニスタン・ロシアなど、命を奪い合う争いが続く。世界史の

なかで300年間も戦がなかった江戸時代は稀である。安全・安心のなかで、日本独自の文化が発展したのである。争いが起これば戦費に膨大な金がかかり、人民の命が失われるとともに経済文化活動は衰退するのである。江戸は日本独自の伝統文化を創り出した。正之公はこの江戸の基礎固めをした人物なのである。

正之公が土津神として祭られている猪苗代町と高遠町は、昭和の時代から姉妹都市を結び高遠郷土研究会交流をはじめ、さまざまな交流活動をしてきた。昨年5月高遠町歴史博物館に建立された正之公像を尋ねて猪苗代町のみなさんが高遠探訪に来られた。博物館に植えられている赤松は猪苗代の赤松である。日本最初の林学博士であった中村弥六(進徳館を開いた中村元起の子で明治の政治家)の指導で磐梯山の山麓に赤松



猪苗代町のみなさん 伊那市立高遠町歴史博物館にて

を植えた歴史があつたという。いろんな形で猪苗代・会津若松との交流活動が拡がることを期待する。「保科正之公を大河ドラマに」の運動は、地域活性化・地域の再発見とともに、歴史と人間追求の果てしないドラマの継続なのである。

完

【伊那市立高遠町歴史博物館長

北原紀孝】